

## 「高度情報技術を活用した全ての子供の学びの質の向上に向けて (フェイズ1シンポジウム報告書)」の概要について

### 1. プロジェクトの目的と報告書の概要

本報告書は、国立教育政策研究所「高度情報技術の進展に応じた教育革新に関する研究」プロジェクト（令和元～3年度）における論点整理班が令和2年2月3日に開催したフェイズ1シンポジウム「高度情報技術を活用した全ての子供の学びの質の向上に向けて」の講演録と関連資料をまとめたものである。

本プロジェクトは、進展する高度情報技術を学校教育に積極的に取り入れることにより「教育の革新」を推進するための方策検討に資する知見を提供することを目的としている。

本シンポジウムは、高度情報技術と教育革新というテーマのもとで、令和元年7月のキックオフシンポジウムで見えた論点の解決を図り、その解決結果を踏まえて次の論点を同定することを目的とした。本報告書は、その企画趣旨と講演録、示唆・アンケート結果の分析の三章からなる。ただし、本報告書はシンポジウムの講演録を速報的に共有することを目的としたため、第1章の趣旨と第3章の示唆・結果分析の箇所については、文部科学省・国立教育政策研究所の組織的な見解を示すものではなく、客員研究員としての分析・記述であることに留意されたい。

なお、本報告書アップロード時のファイルサイズを小さくすることを優先し、画像の解像度を下げたため、既に公開されているシンポジウムのWebページとリンクすることで、スライドの内容を確認できるようにした。あわせて、ご参照いただきたい。

【研究期間：令和元～3年度、研究代表者：猿田祐嗣（初等中等教育研究部長）】

### 2. 各章の要旨

第1章では、プログラムの概要と、高度情報技術を活用した教育革新をめぐる先行研究や実践、言説、前回シンポジウムに基づく論点の洗い出しを行った。その結果として、教育と学びの本質を探る必要性を主張する立場、情報技術の可能性を主張する立場、情報基盤の必要性を主張する立場という少しずつ異なる立場が主張の違いを生み出している可能性を見いだした。その上で、シンポジウムで解決を図るべき論点として、下記を同定した。

- ・ 教育や学びの本質とはどのようなもので、それが技術開発にどうつながるのか？
- ・ 情報技術がどのような学びにつながるのか、それをどのようにつなげたいのか？
- ・ 情報基盤の導入や教育データの標準化で何が起きるのか？
- ・ これらの問いを一体的に検討できないのか？

第2章では、国立教育政策研究所長の挨拶、文部科学省教育行政関係者による高度情報技術を活用した教育のイメージのディスカッション、米国のナショナルテクノロジープランにも関わるJeremy Roschelle氏の基調講演を軸とした東京大学CoREFユニットの白水始教授・齊藤萌木特任助教との3名のディスカッション、麴町中学校と民間事業者COMPASSの協働、及びミネルバプロジェクトに関する二件の事例紹介、最後に事例発表者と学習科学者・教育工学者の聖心女子大学益川弘如教授、ラーニングアナリティクスを専門とする上智大学田村恭久教授らによるガイドラインの在り方に関するディスカッション、次長の閉会挨拶の講演録を掲載した。

第3章では、アンケートの結果分析に加え、講演録に対する田園調布学園大学大学院佐伯胖教授、公立はこだて未来大学美馬のゆり教授、東北大学大学院堀田龍也教授のコメントも得て、今後に向けたシンポジウムからの論点を次の三点に集約した。

- ・ 先述の三つの立場が融合したような質の高い効果的な取組をスケールアップ(規模拡大)する方向性を今後どのように推進するか？
- ・ 情報基盤の整備や情報技術の導入が大規模に行われた後で質向上を図るという方向性の場合、どのようにそれらの取組を評価し、質向上につなげていくか？ そのための調査研究枠組はどのようなものであるべきか？
- ・ 前提となる学習理論や仮説に照らして実践を検証する「学習評価」の重要性に鑑みると、三つの立場が融合して問題解決に当たらざるを得ない共通課題を設定し、その解決成果を実践的に評価し続けるべきではないか？

以上の論点の同定を踏まえ、今後三つの立場を融合すべく、令和2年9月のフェイズ2中間シンポジウムのテーマとして「学習評価」を設定することとした。